

ラジカルなりアリスト、三谷先生を送る

外 村 大

不勉強な私は恥ずかしながらこれまで三谷先生の学問を体系的に学んでことはない。しかし、駒場で教員として一緒に過ごしたこの間、三谷先生の学問の一端と人となりに触れ、それを生み出してきたこれまでの歩みについても少々、うかがう機会を持つことで私なりに学ばせていただいた。

三谷先生のご研究についてとても印象的なのは、提示される問題設定が、深く、かつ斬新であることである。「なぜ武士が自らの特権を手放して明治維新の変革が行われたのか」「近代日本で政治的な抗争で命を奪われた人が相対的に少ないのはなぜか」「他方で、他国民を大量に殺害しているのはなぜか」といった問いは、日本の近代の変革が何であったのかを考え続けてきた人であるからこそできる、根源的な問いであろう。いわゆる団塊の世代の三谷先生が大学生であった頃は、学生運動が盛んであり、「ラジカル」という言葉がよく用いられていたわけであるが、当時において「ラジカルな学生運動活動家」ではなかった三谷先生こそが、実は「ラジカル」な人物であったと言えるのではないだろうか。

もちろん、三谷先生は、空理空論やイデオロギーにとらわれず、物事を正確に見据えるリアリストである。ナショナリズム全否定、あるいは近代日本イコール罪悪とするのではなく、日本近代の達成したこと、戦後日本の歩みを評価した上で、日本の過去の侵略や植民地支配の事実に向き合い反省すべきとすることを語って来た三谷先生は、日本と近隣諸国との歴史問題での葛藤が続くこの十数年の間において、大変重要な役割を果たされてきた。なお、私は中学の歴史教科書作りで御一緒している。その際には、近代国家形成期についての記述に関連して三谷先生の立憲制確立の意味、議会政治の定着、教育の普及、科学技術などにも目配りした原稿について解説付きでうかがい、近隣諸国との関係史についてもあれこれと最新の研究成果を踏まえて議論しながら文章を練るという貴重な経験をさせていただいた。

こうしたラジカルなりアリストとも言うべき三谷先生の学問は、どのように形成されたのか。もちろんそれは、日本政治史の研究者としての基礎を固められた、学部・大学院時代の訓練の賜物であろう。確か、自分は史料批判にもっとも厳しいゼミを出ている、ということ言われていたと記憶している。そして同時に、狭い専門の日本史に閉じこもらず、広く学び続けて来られたことが大きく関係していると拝察する。

もともと、三谷先生は高校時代、マックスウエーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本の精神」を読むなど、社会学に関心をお持ちだったとのことである。大学入学後の駒場では、佐藤誠三郎、見田宗介、中村隆英といった先生の授業を通じて政治学、社会学、経済史も熱心に学ばれたようである。

しかも、三谷先生は、教員・研究者となられてからも実によく周囲の人びとから学ばれ、新しい視点や方法に関心を示し、取り入れてこられた。三谷史学のエッセンスが盛り込まれたというべき、昨年出されたご著書『愛国・革命・民主』には、文化人類学、日本語学、複雑系等々の駒場の同僚の先生方のみならず、国内外から集まったご自身の教え子の研究をも摂取しながら、ご研究を発展させてこられたことが記されている。まさに学際性をうたう駒場に相応しい活動をされて来られたと言えよう。ちなみに複雑系については、駒場寮廃止問題で教員が動員されて見張りに立ったりしていた時の、物理の先生との「雑談」がきっかけになったとうかがっている。

こうした研究に対する姿勢もさることながら、三谷先生は学生の指導・教育についてもとても真似できないような熱意をもって取り組んで来られた。駒場近くの居酒屋のカウンター席に座ってなにやら本を読みながらお一人で飲んでいた三谷先生に、歴史学部会のある先生が声をかけたところ、「いま明日の授業の予習中です」と言われたという伝説の真偽はともかく、授業の準備について力を注いでおられたのは間違いない。そして、授業の後でも、あるいは授業以外の場でも、学生とのコミュニケーションを大切にされていた。アジア科の卒論指導、内定生の歓迎会、卒業生の歓送会でも、御多忙にもかかわらず、いつも三谷先生の姿を見つけることができた。しかも自分の指導学生であるか否かにかかわらず、とても熱心に話しこんでいるのが常であった。院生のコンパ等でも、いつも制度上の指導学生以外の人も含めて集まり楽しく飲んでおられたようである。「駒場のいいところは学生を囲い込まないところです」という話は、わたしが着任して早々に三谷先生から教わったことの一つであったが、その実践については、その後も常々目にすることができたわけである。

学生との関係、あるいは教育にかける熱意ということについては、3・11後の院生に向けたメールのことを思い出さずにはいられない。私は、増田先生、遠藤先生、足立先生らとご一緒に地震の時には地上ではなく飛行機の中、地震と原発事故自体を知ったのも1日遅れで日本から遠く離れたルーマニアにおいてであったが、同地の映像ニュースを見て、心配ではあるが何もすることもできない状況にあった。そんななかで自分がやってきたちまちまとした仕事自体も何の意味があるのか、というようなことを考えずにはいられなかった。しかし同じ頃、三谷先生は院生を励まし、このような時こそ、自分たちがなすべきことを行うのが大事である旨のメッセージを出されていた。同報で送られてきてそのメールを読ませてもらった私も、落ち込んでいられないし、自分の仕事をしっかり続けなくてはならないということを実感させられた。

取りとめもなく思い出すことを並べて、三谷先生をなんだか仕事一筋で来られた方として描いてしまったようである。これは、実際にそうだとも言えるのかもしれないが、私がクラシック音楽には疎くオーディオもわからず、その方面での三谷先生と共通の話題がなかったためという理由もある。その点は割り引いて理解されたい（なお、ご自宅のオーディオは立派なもので、理想の音の追求をされていた様子を記憶している）。

もっとも、私と三谷先生との共通の趣味と言えばアルコールを入れることがあったかもしれない。ただ、そこでもしばしば語られたのは、研究・教育環境における駒場の状況の問題だったようにも思う。しかし、そうした愛するがゆえの駒場に対する苦言も、おそらくご退職後は「現役の人たちに任せる」ということで、三谷先生はもう語られないことになさるであろう。それもさみしく、同時にいくばくかの不安も感じるが、駒場に対する責任という肩の荷をおろされた三谷先生からゆっくりお話をうかがうのもきっとよい機会であろう。研究面でますますご活躍され、重要な役目を期待されるのは間違いない三谷先生には、ぜひ、これまで同様、健康には気をつけて、時々はお時間を作っていただくことを願いたい。